

寺座

竹田聽洲

「當村之内字さ段と申、家別只今ニ而拾三軒御座候處、往古より西株 東株と號け、諸講諸會合 其外、檀那、寺位、牌之、列ニ到るまで、左座者、西株、右座者、東株と立テ別レ、勤來り罷在候。

(兵庫縣多紀郡味間村東吹 河南市藏氏所藏文書天保十年三月願主德右衛門以下連署、篠山藩南組代官宛訴狀

「乍恐奉願上候口上之覺」より抄出。——傍點筆者——)

(一)

「寺座」といふ語は何人も恐らく前代未聞であらう。かゝる文字の古文獻の上に記されたものは筆者と雖も亦寡聞にして知らない。然し乍ら日本の社會に於ける佛教の歴史的發展の基層には、祖先信仰との廣般且つ強度の結合の存するは疑ふべからざる事實であつて、只この祖先信仰といふものが多年重い研究上の禁忌を課せられて來たゝめに、その本性は未だ充分に解明し盡くされるに至つて居ないが、之が我が固有信仰の中に極めて重い比重をもつ事については充分に推定し得べき根據がある。佛教は日本の社會の裡に發展するに當つては固有信仰の側から種々の屈折を蒙らざるを得なかつたが、就中祖先信仰の側からするものはその尤なるものであつた。之は觀點を換へれ

ば日本の祖先信仰は固有信仰の系統をひく神道と、外來文化である佛教の側とに岐を分かちつゝ歴史の裡に幾變遷を累ねたのであるとも考へられる。

今日村落に於て神社と寺院とは誠に對極的な位置を占めて居る。それは「誕生は宮さん 葬式は寺」といふ村の常識の中に端的に表はされても居よう。一人の人間の誕生は單なる生理的な分娩の謂ではなく「氏子入り」によつて社會的に確認せられて始めて誕生は公然の事實となる。又現在の寺院から葬式と法事とを除けばその社會的機能の大部分は失はれてしまふといふも過言ではない。之等は勿論神社寺院のもつ機能の全部ではないが、少くとも村の人生に對して果す機能の中最も代表的のものであり、從つてそれらは人生の始と終、吉と凶とに拘り、誠に對立的な姿をとるとみられる。然し、兩者が村の聖別せられたる場所として、共に宗教的權威を以て村落社會に臨むといふ點に於ては全く揆を一にするものがある。固よりその「權威」の構造や内容についていへば、兩者の間には大なる相違もあるであらうが、然し、村の生活の「俗」なる側に對し「聖」なる側を代表するといふ意味に於ては、兩者の間に一種の共通な面のある事を認めざるを得ない。

偕て日本の社會が、宗教との關係に於て持つ最も著しい特徴の一は、人間の個々に依つてよりは、寧ろその群構成的な規模に於て神が祭られ、人間社會の俗的秩序が人と神との宗教的秩序の中に反映せしめられる所にあるとせられる。「宮座」を構成する精神的原理は實に茲に胚胎するのである。然らば、神社に對立するもう一方の極である寺院に於ても、「宮座」に對する「寺座」とも稱すべき組織を發展せしめたとしても、敢て怪むには當るまい。之が物珍しい感を與へるのはたゞ從來そうした方面に注意が向けられなかつた迄の事である。

筆者は昨年來京都大學文學部國史研究室を中心に行はれて居る「近畿村落の歴史民俗的研究」の一端に参加する機会を與へられ、主として兩丹地方村落の同族祭祀の實態を調査しつゝあつた所、最近圖らずも、奥丹波多紀郡吹下村^{シモ}即ち現兵庫縣多紀郡味間村^{アヅマ}東吹^{ヒガシフキ}に於て、正しく寺座とも稱すべき實態が近世初期以來持續せられ、現在に到つて猶その形骸を存して居る事實に突當つた。茲に與へられた紙面を借りてその要點を紹介し、一二の愚考を加へて大方の叱正を仰ぎ度いと思ふ。

(II)

我國自然村落の成因、從つて又現在に於けるその構造形式、共に之を一律に論ずる事は出来ない。その中で、幾つかの同族結合が集つて一の村落を形成して居る事例が往々各地に發見せられるが兩丹地方は、そうした形式の村落が極めて多い點で、頗る特色ある地域相を示して居る。カブとかマキとかよばれるものが之である。さてこの味間村は味間^{アヅマ}と吹^{フキ}とに分かれ、その下に各々數個の大字を含んで居て、その吹の方の大字の一、東吹下^{ヒガシフキシモ}が更に「段^{ダン}」と「前^{マエ}」との二區に分かれ、その中、「段」の十四軒は全部河南^{カンナ}を姓とし、之が東株^{トウキ}（八軒）西株^{セイキ}（六軒）といふ二つの同族結合に分かれ、その十四軒のみを代々檀家とする淨土宗鎮西派の西蓮寺といふ小さい堂庫裡の寺が同じ地域にある。然しこの東株と西株は夫々紋所（表紋裏紋共）を異にし、別個に株の稻荷祠を祀り、別個に不動産を所有し、夫々に伊勢講、明神講、虫干講、初午講（稻荷講）、御日待、愛宕講、大師講、念佛講、氏神講（講當講）等夥しい許りの講があるが、その講員は皆株の構成員と相覆ふ有様で、互に極めて強固な團結を示して居る。この中虫干講は、この地方に一般的な「株講」に外ならないもので、株の系圖（西株のは卷子仕立、桓武平氏

の末流に掛け「平姓一品親王後胤河南氏系圖」と稱し正副二卷、恐らく元祿頃の作か）を年々當屋に廻して床にかざつて株中が直食する。時期は盆前後の暑い時分で、平素祕藏する系圖の虫干をかねて、祖孫一體の同族感を新にしようとする所からこの名を得たものらしい。氏神は今「前」の氏神春日神社に合祀されてをり、以前は「段」限りの、雲岡神社と稱する虚空藏菩薩を神體とする氏神が西蓮寺の傍にあつた。氏神講といふ名稱は直ちに、宮座を連想せしめるけれども、別名を講當講と稱し、現在遣つて居る明治十一年以來の講巡帳に、春講當、冬講當といふ文字のみゆる所からすれば、それは恐く各々春ゴト、冬ゴトであらう。かく數多の講が皆株によつて營まれて居る事はそれらの講が凡て一面に株講である性格を荷ひ、相依つて株結合の強固さの特徴づけるものである。それは恐らく東西兩株共、純粹に血縁分家の後裔から成り、奉公人分家や、後入株の様な擬制的分子を含んで居ない事にも理由があらう。誠にこの場合株はカマドを分有する一つの大家族といつた感じで、河南文書中天保十年の「株爭終始帳」の末尾「末代迄心得之事」なる一節に、「何事茂此度被定候故（株爭論結著の事をいふ、下に出づ）甚以大變至極之事譬へ末代ニ至迄此御恩先祖之事、忘失フ事勿レ、……株内之義へ親子兄弟同様ニ睦敷致、互ニ心ヲ合シ、必他言致間敷……」といつて居るのは當事者の所懷を端的に物語つて居る。

斯くこの東西兩つの株は、河南といふ姓を同じくし、住地、菩提寺、氏神を一にしてをりながら、各々別個の結合體として、古來極めて仲が悪く、事毎に衝突を繰返して來た。殊にその争の中心となつたのは兩株と西蓮寺との關係についてであつて、この點を繞つて天保十年、兩株は篠山藩に訴へて、黑白を法廷に争ふに至つたがその當時の關係文書が西株の河南市藏氏方に保存せられてゐる。それに依ると、起訴以來事件がともかく一應の落着を見る迄に滿二年を要して居るが、その訴訟事件の發端をなしたものは西蓮寺に於ける兩株の座席の左、右、如何といふ

事にかゝつて居た(冒頭引)。この座席の位置といふ事は、二つの株にとつては、實に社會的身命に關する底の重大問題であつたのである。

西株所傳の系圖、記錄、傳承を綜合するに(東株にはさういふものがなからしむる)、河南氏は、もと嘉祿の頃河内國丹南若江澁川の三郡を領したが後ち左源太友房といふ者の代に現地に定住し、長男三郎左衛門は跡目相續、次男三郎右衛門は別家、三男長三郎は出家して法名友道と改め寛永の頃之が西蓮寺の開基となるのである。一般にこの兩丹地方の同族結合であるカブやマキがもつて居る、その現地に定住するに至つた先祖に關する傳承、或は往々彼等が、所謂同族神として祀る神佛と彼等の先祖に關して語る緣起の類をみるに、その先祖は多く流浪の果ての武士であり、時代的には概ね中世末期から近世初期の頃に掛けて物語られて居るのが一般である。之は決して偶然の一致ではなく、中世末の全國的な大動亂の後を承けて近世村落の成立と共に、それ以來その村落構成員もほど一定し、根本的な入替りのなかつたといふ、背後の大きい歴史的事實を物語るものであるが(關西地方史研究協會會報第三、號拙稿「丹波丹後の同族結合」)、河南株も亦さうした一例を充すものに外ならない。然し西株の系圖をみるに、同じく河南を姓として同一場所に住し、一見同族であるかの如き觀を呈しながら、東株については全く何等の記述もなく、又現在の傳承に徵するもその明確な由來は分らないまま、之を異族視する蔑視感だけは極めて強烈なものがあつて、兩株の發生的な關係は天保十年の株爭論の時にも既に充分な事は分らなくなつて居たらしい。冒頭引用文の云ふ如くたゞ「往古ヨリ西株、東株ト號ケ……左座者西株、右座者東株ト立テ別レ、勤來リ罷在」つたのである。この東西兩河南株がも一つの血統から出た一族であるか、或は全然別の氏族であるか、同族とすれば東西何れが本家筋、何れが分家筋であるか、西株の系圖に、分家したと記されて居る三郎右衛門の後裔はその後如何様に發展して行つたのであるか、若し又全然別の血統とすれば、何れ

が先住で何れが後入りであるか、等についての客觀的眞相は今日全く知る由もない。

然うした血統の同異はとも角として、この猫額大の小天地に住む二つの同族が、近世を通じて社會的な勢力の隆替と共に、絶えず反目と暗闘を繰返して來た事は、この同族相互にとつては最も基本的な事實であつた。天保の爭論のとき双方から藩に提出した「乍恐奉言上候再返答之覺」（下書）にみるも西株の方は

「當村之内、字段ニ而、西株之先祖、河南出雲尉友房之嫡、三郎左衛門子、長右衛門ト申者之頃、居屋敷ニ反斗リ構へ、四方ニ堀ヲ仕廻シ罷在候處、……………三郎左衛門弟、三郎右衛門義ハ大庄屋御役蒙仰、同所東屋敷へ別家仕罷在……………兩家トモ究竟ニ暮居候處、右長右衛門、續惡シク、段々衰微仕……………」

その内東株の

「先シ忠右衛門之ヲ承リ、長右衛門方へ飯米并小使銀等追々仕送り仕、高利ヲ掛ケ終ニ忠右衛門方へ半分譲リ渡シ申候。當時ノ五郎太夫居屋敷ニ而御座候。其節忠右衛門先祖之此屋敷へ新宅仕候義者、全ク神佛之御加護引合ト大キニ被悅候。」

といつて、東株を先祖の時以來惡意に満ち充ちた存在と目して居る。殊に忠右衛門を代々襲名した東株中の一家筋は、對西株の葛藤に於て終始指導的役割を演じ來つた、西株にとつては最も憎むべき對象であつた。所が同じ時の東株の方の具申狀では、

「（西株が）河南出雲尉友房之末孫ニ而、私共同姓之者ニ而、往古ヨリ、東西兩株ニ而、諸會議、其他寺宮之儀迄、勤來リ候様、御訴訟にモ奉申上候得共、中々往古者左様之振合ニ而ハ決而無御座候。長右衛門ヨリ追々相分カレ、貳軒參軒地類モ西手ニ出來候ニ付、一株立之、西株ト相唱、私共地類者、東手ニ有之候故、先方ヨリ東株

ト唱候譯合ニ有之哉ニ奉存候。當時五人之者（西株を指す）トハ紋所モ相違致シ、兩株ヘタテ有之……」とあつて、主客正に轉倒して居る。相互に古來からの自己の側の社會的優位を主張し、併て相手方の劣位を根據づけんとして居るのであるが之は天保十年といふ時に於て、偶々爭論といふ機會を得て記録せられた、双方の傳承であつて、果してその何れが客觀的事實を謂つて居るものであるかは固より之だけでは斷定する事は出来ない。或は双方とも眞相を傳へて居らず、事實は別の第三のものであつたかも知れない。然し斯かる兩方の傳承からして、その勢力争ひが遠く且つ深いものである事は、充分看取する事が出来る。斯うした長年に亘る感情の對立は、藩廷の判決の如き法的操作によつては到底清算し得らるべき性質のものではなく、例へば裁判の直後、西株によつて作られた、爭論の經緯に關する老大な記録である上出「株爭終始帳」には上に引いた句に續けて

「……………此後（裁判を指す―筆者―）ニオイテ、東株者ニ茂、表向ハ隨分美シク附合、必邊身許ス事不成、只此上ハ何事茂、引ケ取り不申候様……………必不怠心得違ヒ無之候様仍而如件

吹下村

西株中

五軒」

と一族を戒めて居る所等にも端的にその含む所を表はして居る。世態を全く異にした今日と雖もさうした對立は消去つては居らず、例へば兩株の間には目と鼻の間なるに不拘決して通婚が行はれない。

所が斯うした兩者の社會的な勢力争ひは、それが實際に具體化するに當つては上にも觸れた如く、いつもその菩提寺である西蓮寺との關係の裡に醸ぜられ、一種、宗教的な様相を帯びる事によつて、事態を極めて特徴的ならし

めて居る。該寺をめぐつて、實にこの二つの株は事毎に對立し合つたといふも過言ではない。就中、最も問題化した繫争點は、(一) 同寺に於ける兩株の座席の位置及び (二) 同寺草創の緣起と兩株との關係、並にそれと連關して同寺の過去帳上に記載された兩株先祖の戒名の優劣といふ事であつた。

(III)

この座席に關する争ひは實に長年に亘る兩株の全葛藤を象徵するかの觀がある。

之は早く既に天明の頃に一度問題化した事があつたが、この時は隣村栗栖野村若林寺の調停によつて事なきを得た。然るに、

「其頃へ座席之義、村役人ニ不差構、床柱(寺の筆者)之左右ニ引別カレ兩方へ連席イタシ、何事モ穩ニ納リ來リ候處、三十五六年以前(天保十年より。文化元年頃―筆者―)西株者纔ニ三軒ニ相成、東株五軒、外に類中三四軒、都合九軒ニ罷成、西株無人數ヲ附込、東株ヨリ舊例ヲ潰シ候故、西株ヨリ彼是申出、爭論ニ相成、諸會合引別レ罷在候」(冒頭所
獨文書)

とあり、その舊例を潰すとは、西株へ無斷で、從來西株は左座、東株は右座と決つて居た西蓮寺に於ける位牌の位置及び株の座席を替へ、右座から三名を左上座に据えんとして祖法に背いた事をいふのである。この時も村庄屋が仲に立ち、西株としては一步を譲り、東株中の古老安兵衛一人一代に限り左座に加へる事を承認して妥協が成立したのである。所が安兵衛の没後も東株は一向右座にかへる様子のない所から天保十年四月西株から東株に申入を行つたのを東株が蹴つた事から、西株は「何レ此コト下方ニ而へ事決リ不申、御上樣訴エ可出」となし附人廣瀬大助

に訴出た。廣瀬は更に組頭二名を引入れて更めて調停に立ち

イ、左座ハ東株ヨリ一人入レ、左右ニ別席ノ事、

ロ、諸會合ハ東西別々ニ分カレテ行フ事、

ハ、西蓮寺ハ東株忠右衛門家ヲ開基トシテ之ニ寺世話ヲ任せ、西株ハ一切手ヲ觸レザル事、
等の條件を以て、双方に對し、之等の事は内々落の上層部にも連絡濟と稱して、半ば威嚇的にその承認を慫慂したのであつた。

然し西株としては、「かくては西蓮寺の意味も離れ、東株一人に而も、上席と申候而者、舊例皆潰れし様」感ぜられ到底承認し難い所であつたので、調停側は更めて第二案として次の三條件を示し、今度は調停者の面子にかけてもその一を承諾して和睦する事を強制的に要望した。その條件とは

一、村庄屋上席の事、

二、諸會合は東西を分たさる事、

三、西蓮寺は惣檀那中の開基と認める事、

であつて、西株は己むを得ず第三項を承認する事とした。東株が内々地方役人^カに對して裏面より策動して居ると睨みつゝも、西株は致方なく承諾したのであるが、西蓮寺を次項にふれる如く西株開基の菩提寺と考へる西株としては之は大なる讓歩であつた。

然し今度は東株が承知しない。そのため調停は不成立に終り、調停者は連袂その任を辭するに至つたので、同年六月西株は愈々之を表沙汰として、寺社役所に提訴したのである。審理は諸種の事情のために延引し、終に十二月

五日郡代、寺社奉行、郡奉行、代官等列席の下に裁判が開始せられた。審理の中心が西蓮寺の由來と座席の問題にあつた事は言ふ迄もない。同月十一日判決が下された事は、翌天保十一年正月西蓮寺（當年の門中年行事）と現住忍譽連署で惣門中宛に出された「永代定一札之事」なる書狀によつて明確に知り得るが、それでは、

- 一、正盆十夜其他臨時佛會之節、座敷床柱境ニ而、東西ニ列席候様被仰付候事、
- 一、都而寺宮諸會合之節西株東株之甲乙無之、一統柔和ニ談合有之候様被仰付候事

（以下條省略）

といふ事で、十二月二十日夜、先の調停役立合の下に、西蓮寺に於て東西兩株不殘列席之上申渡されたのである。

所が更に神地分割問題や東株の文書偽造容疑、又東株は住職が西株に加擔したとなして深く含む所あり、門中各寺院と氣脈を通じて冤罪を被せ、之を追出さんと策動して表汰沙とした事から、事件は更に別の方向に發展して、審理は又約一ヶ年を要したが、結局東株の敗訴となつたらしく天保十二年一月、東株は事件の中心人物忠右衛門が庄屋役を沒收され三十日の「追込」に處せられたのを始め、東株と組んだ門中各寺院に至る迄夫々處罰せられた。東株としては中心人物の服刑中、西株が官邊に策動して後事を有利に展開せしむる事は最も恐るゝ所であらうと、西株は揚言して居るが、事實西株は好機措くべからずとして可成働きかけんとした形迹がある。翌月閏正月二十三日、遂に寺社役所によつて定書が裁定される運びとなり、翌日庄屋宅にて調印手打式が行はれ、同月二十七日庄屋を召出し寺社役所より公布せられた。それに依ると座席に關する項は、

- 一、宮寺席之儀、高下之定無之間、其間席ヲ仕切、貳席同様ニ相心得、東西一株ツツ左右ニ相別レ着座可致事。

座席左右ニ相別レ、着座致候上者、東株ヨリ西株座席之差圖致間敷事。

西株ヨリモ東株座席差圖致間敷事。

一、墓地高下之儀ニ付、少茂^モ故障差支之筋無之間、東西株墓地混亂不致候様、先規之通、相守可申事。

(中略)

一、位牌之儀者、東株之位牌へ東ノ方ニ居へ、西株之位牌へ西ノ方ニ居へ置可申事。

右之趣東西兩株之者共一致致納得、子々孫々ニ至迄異端有之間敷者也。

天保十三丑年閏正月

寺社役所(印)

吹下村

西蓮寺旦那

西株中

で、當然東株へも同文のものが發せられた筈である。條文には明示して居ないが西株が勝訴であるといふのであるから、西株が左座を占めたものであろうし、この定書の發布によつて前々天保十年の定は自動的に失効したものと考へられる。

この問題について、その後、又紛糾があつたか否か徴すべき史料を缺いて居るので明かでないが、西株が左座、東株右座の制は今もそのまゝ實行されて居る、今の西蓮寺の建物は文化九年の建立で、従つてこの事件當時のものであるが、小さい藁葺の堂庫裡様式で中央本堂は、内陣後壁から直ちに須彌壇を作り出して所謂裏堂に當る部分がなく、同じく後壁に密着して左右が位牌壇となり、東西に分かれて夫々東西株の位牌が並んで居る。檀家はこの兩株以外にないのであるから、各家の位牌は東西何れかの壇に必ず分置される。内陣の西側は直ぐ疊の座敷で正面中

央の床柱を挟んで左が床、右が違棚となる。この天保十二年の定には墓に關する條項が含まれて居るが、建物の後は直ちに墓山となり西株の石碑は一群をなして中腹に、東株のは頂上に同様群立して居てその前が可成に廣い林空となつて居る。以前は墓地も夫々山の西縁と東縁とに分かれ、山の辻に辻墓とて歷代住持の墓及び當西蓮寺の本寺即ち篠山藩主の菩提寺光忠寺の預墓があつたのを延寶（一説享保）の頃東株から東西全部を上墓して辻墓へ葬る様勸誘しかけたが西株はその申出を蹴つた。それは西株としては

「以前ヨリ西ヘリニ而御先祖之御廟所在之、新規之墓所者無益之事、矢張以前ヨリ仕來リ通り本尊之前ニ而引導燒香在之候上、此迄通りニ可仕」（天保十年八月駕右衛門以下、兩組代官宛「忍奉言上候再返答書之覺」）「西株之者、墓之儀ハ寄附上席也。又先祖之由緒有之テ社、本尊彌陀如來之尊前ニテ引導燒香仕來リ候事、此儀捨不被申、古來持來リシ墓地ニ而……東株儀寺之門ヲ打越ヘ山ニ而燒香仕、西株儀ハ尊前ニ而シヤニ仕候」（燒香）（右下書）

であつて、現在に到る迄、葬式の引導燒香は、本堂外陣前では西株のみが行ひ、東株には之を許さず墓地で行はせるといふ事が、左座をしめる事と共に西株には最も誇らしい優越感として脈々傳承されて居るのである。

右の様な事實をみるとき、「宮座」に對して「寺座」といふ語を之に與へた吾人の意圖の奈邊にあるかは言はずして最早や明白であらう。之は寺といふ宗教的權威體に對するに、一座といふ形を以てせんとするものであり、宮座を結成するのと、全く同じ精神傾向の流に棹すものである。それにしてもこの場合、座席は何を意味して居るのであるか。單に座の左右といふ位の事が斯く裁判に訴ふる迄に當事者間に重大問題化するのは如何なる理由からであらうか。それは如何なる精神構造に基くものであるか。

(四)

之には「宮座」について少しく考を費す必要がある。宮座に關する資料の中には、本座に對し新座といふ類のものが甚だ多い。又之を平座といひ、或は新の字を嫌つて眞座とか神座といつて居るものもある。例へば京都府綴喜郡宇治田原村禪定寺の氏神建藤神社には、一族座、本座、新座、矢座があり、同相樂郡川西村菱田の春日神社も本座、眞座、今座、居座の四座があり、或は大阪府北河内郡交野町の住吉神社には正座と脇座、その他に掛座がある。一般に「宮座」とは神社に於ける「集會」とその集會を作る一定の仲間といふ相互に關連する二つの意味を含んで居るが一定の仲間は一座するものであり、一定の座席はその座席を占める一定の集團を意味する。一つの神社に對して二つ以上の宮座集團が如何にして發生したかは我國の社會——宗教史上の重大問題であるが、その最も普通に考へられるのは神人の間に社會的な身分關係の持込まれる場合であらう。即ち最初舊新村民を區別し、舊村民のみで宮座を結成し、他を平とか非衆として座外に置いて居たものが、時代の推移と共にその座外の平が逐次社會的經濟的實力を蓄積し來り、茲に祭祀權を要求するに至つたとき、舊座人の側で之を承認すれば、從來の舊座人の宮座に對して、茲に新しく別の座が結成されるに至るであらう。東座・西座、北座・南座、左座・右座等の二座對立してあつて、その新舊が問題とされる様な類も結局この本座・新座に外ならぬものがある。之は一座して神を祭るといふ、神話時代以來の民族の傳統的感覺に根ざすものであるが、この場合本座が新座よりも神の祭りに於て、種々の優位に立つのは言ふ迄もない。それは人間社會の秩序が、人間と神との關係面に投射されて、神に一層近くあるものは、その事に於て人間社會の秩序に於てもより一層の優位を何よりも具體的に保證せられるからである。村落内

部に於ける或る種の社會集團がその存立の保證を宗教的なものとの關係の裡に求めようとするのは、獨り宮座の場合に限らず、恐らく宮座の前段階乃至は祖型とも考へられる同族祭祀に於ても亦認められる所であつて、兩丹地方等の所謂「株講」「先祖講」の類もそうして成立したものが頗る多い様である。丹波の一例を舉ぐれば京都府南桑田郡千代川村千原には永田株が四つあり、毎年正月十四日四株連合して株持の十六善神畫像を廻當屋に祭り「經の當」を執行ふに對して、同部落内の美馬・河原林兩株が連合して「兩苗講」を行ひ、伊勢講の軸を祭るの等はその典型的なものであらう。座席は單なるシートではなく、寧ろ或意味の社會的地位を象徵するものであるが、殊にそれが宗教的な場に於ては、時運を逐つて隆替する其の時其の時の社會的地位の消長を超えて、一種不變の恒久性を持つ所から、そうした座席の象徴的意義は一層深化するのである。當事者にとつてこれが重大問題であるのは寧ろ當然と言はねばならぬ。「新座」が「神座」とか「眞座」とかきかへられるといふ事自體、かうした座のもつ象徴性を何よりも雄辯に物語るものである。之は獨り神社の場合のみならず、佛教の場合、殊に凡ての社會的差別を撥無して弘く一切衆生の結縁を建前とする類の法會、例へば淨土宗の五重相傳法等の場合に於てさへ、その密室道場に於ける受者の座席の順位が、俗社會からの制約を免れず、重大問題としていつも關係者の鋭い關心を集める事實等も、やはり斯うした宗教的な場に於ける座席のもつ深い象徴性に由來するものであらう。

偕て今日の宮座に於て、座を構成する原理となるものは、年薦、家筋、職能等であるが、殊に年令階級によつて座が結成される傾向が極めて特徴的である。所謂若座、中老、年寄、オトナ等といはれるものゝ外、宮衆、六人衆、八人衆、大夫、座頭、神主等と呼びながら、事實に於ては座人中の年寄から構成されてゐるもの、更に又年寄中最長老一人を擧げて一老とするものまで、ともかく年薦によつて座人を階級づける事は、明かに地縁的觀念がその根

底に働き、かゝる場合には氏神と呼ばれては居てもその神は當然産土神の性格を荷はざるを得ない。之に對して一定の家筋によつて座が構成される場合はその宮座は直ちに、封鎖の特權團體といふ形態をとつて来る。例へば京都府久世郡久津川村平川の平井神社では北尾安村の二姓のみが宮座株をもつて居る如きはその一例であるが、殊に滋賀縣、奈良縣の宮座に多くみられる彼のモロト（諸人、舊人、村生人、師統、諸頭）は、畢竟「諸頭」であつて神事頭人を勤め得る資格者の集合として、宮座に於ける一の典型を示すものである。而して之が村生人、舊人、守人等と記されて居るのは、かゝる人々が村に於て古い家格を有し神社を保護すべき特別の任務と權限を有するといふ意識の表現に外ならず、やがて之が座筋を示す言葉となつて來て居る。かく座株が一定の家筋にのみ傳へられる場合、そこには明かに血縁的觀念が働いて居る。たゞ一座の神社に對して二つ以上の座が併立して居る場合は、地縁的觀念が入込んで來て居る事が一應考へられるのであるが、家苗を異にして獨立に座株をもつ家々が事實上は皆同族であつて、同一祖先の分派である場合もあるから、強ち之を一概に言ふ事は出来ない。然し今日の宮座が概して地縁的である事は否定する事の出来ない事實である。

然し之等も邇れば血縁座より漸次地縁座に向つて來た傾向がみとめられ、前者は後者よりも概して古い形態を示すものと考へられる。従つて今日實例としては少くなつて居るが、單一の家筋のみが一つの座株を獨占する所謂一族座は宮座としては最も純粹な形であらう。京都府相樂郡棚倉村大字綺田の古川座の如きは四十數戸の古川姓のみで一座をなして居り、滋賀縣滋賀郡小松村大字鵜川の白髻神社の山田講は山田姓五十餘戸より成る。（肥後和男博士「宮座の研究」）これらは同一族たる信念により結合されて居るのであり、かゝるものには氏人以外の者の座入は考へられないので座としては全く封鎖的となる。かくてその神は全く氏神たる性格を荷ふに至るのであるが之等はその神とそれに奉

仕する氏族集團の歴史的性格に基くものである。

斯うした場合は同族祭祀、即ち先の兩丹地方のカブやマキが行ふ株構、先祖講、信州伊那のヂルイが祭るウェーデン様、栃木縣群馬縣のエツケウヂガミ、鹿兒島縣下のウツガン等の如く一定の同族が年間一定の時に集り所謂同族神を祭るものとその形はやゝ近似して来る。之等の同族神は何れも神社ではなく、それ以前の小祠、墓、或は同族の中の宿を年々廻る木牌や掛軸などで、一族宮座とはその規模に於て大なる懸隔があるが、然し精神構造としては同じ類型に屬するものである。たゞマキとかカブとかヂルイとかエツケとかの民俗學上の所謂同族結合は血縁地縁の相即の上に成立して居るもので、數戸から多くて十數戸位が普通であり、古川座や山田講の如く四五十戸もある場合機能的にみてそれを所謂同族結合の中に含ましめ得るか否かは更に綿密な調査を必要とするであらう。

宮座（就中一族座）と同族神祭祀とを比較研究して兩者の關係を脈絡づける事は我國の社會と宗教との關係構造を拆出する上に重要な鍵を含んで居ると考へられる。大阪府泉北郡美木多村大字上の美多禰神社の右座は吉田氏一族より成り代々神主を勤めて來たので神主座といはれて居り奈良縣生駒郡安堵村笠月の御靈神社の北座は又吉田座ともいふ吉田一統十二戸より成る。（肥後博士
前掲書）之等は固より一族宮座であるが、之に對して丹波地方例へば京都府南

桑田郡篠村山本の宇野姓の中九軒が宇野株を成し「宮の當」を式内桑田神社で行ひ、又同郡大井村並河の田中株十七軒の中、本家株十二軒のみが式内大井神社に對して「宮座講」をもつて居る。之等は共に村氏神としての祭禮は別にあつて、同族結合としてはそれには少しも關與しない。従つて「宮の當」「宮座講」といつても、それは右の兩吉田座の例等と異り、同族祭祀の場所を村氏神社に得て居るといふにすぎないともみられ、事實同族結合の紐帶を宗教的な仕方で年々確認するといふ機能面に於ては株講やエツケウヂガミの場合と本質的に異らない。従つて株

自身にとつてみれば同族祭祀であるが、氏子集團全體からみればその内部に於ける血縁集團として、神社に對して何等かの排他的な關係をもち、名稱も「宮座」といつて居る點は美木多の吉田座や安堵村の吉田座の如き一族座と、その相違は極めて微妙なものとなる。

かくて一族座といつてもそれが氏子集團と相覆ふものと、一族座が氏子集團の中に特立し、自己の周圍に座外の氏子をもつものがあるのであつて、その古態といふ點からいへば前者の方がより純粹に近いと一應考へられる。

而して未だ神社の體裁を整へない同族神祭祀はそれよりも一層純古の佛を傳へるものと考へられそうであるが、然し之には猶多くの資料を蒐集した上で綿密な考證を必要とする。所が茲に最も注目すべきは、かゝる同族神祭祀が往々佛教と關係をもつものゝある事である。前記千代川村永田株の十六善神もそうした一例であるが、京都府南桑田郡曾我部村法貴の法貴株ではそれは大日如來の草堂であり、殊に管見に入つた中で最も數の多いのは該同族の先祖（歷代をも含めて）の戒名を記した墓碑、木牌、掛軸、系圖等を同族神そのものゝとして居る類である。（佛學

二卷三號拙稿
「佛教的同族神」

替へられ得る性質のものと云はねばならぬ。即ち神道的であるにせよ、又佛教的であるにせよ、それが同族に臨む場合には、機能的には共に同族神として同一の範疇に屬するのである。史上に顯著な彼の神佛習合は、かゝる精神的基層に支へられて、始めて具體化したものに相違ない。同族神祭祀が神道的内實をもつた場合それは宮座、殊に先づ一族宮座に系統づけ得るものと一應考へるならば、それが佛教的な形式をとる場合、やがて寺院に於ける座、即ち寺座を發生せしめてくる事も理論的には考へられよう。その場合寺院が漢字「寺」の原義や、況んや梵語「阿蘭若」から甚しい屈折をうけて居る事は喋々を要しない。

大阪府南河内郡喜志村大字宮の美具久留御魂社には祭神大國主神の裔孫といはれる青谷氏が一族を以て宮座を組織して居たが、近世に至り他の氏子の反對をうけて之を解散したといふ。（後肥博士前掲書）斯ういふ例は他にも多い事であらう。河南株の場合は一地區を二つの同族のみで占め他に緩衝的な役割を果す第三者がなかつた事と、同族結合が極めて強固であつたといふ事情が宗教的場に於ける座の象徴的意味を一層深刻にした結果、西蓮寺に於ける座席の争がかくも激化したものと考へられる。

(五)

宮座が殊に血縁座の場合、或は又同族結合に於ても、それらは共にその根底に一種の歴史的性格をもつ事が原則である。譬ひ自己についての明白な歴史は知られなくとも、さうした歴史をもつものとする意識が働いて居る事が一般である。座もさうした歴史的性格を背景とする事によつて、始めてその象徴性を充實せしめるのである。東西河南株の寺の座席に關する争には、實に各株と西蓮寺草創の縁起に關する歴史的關係が含まれて居るのであつて、前記座席の争は寧ろ形式であり、この草創に關する争こそ兩株の争の内實をなすものである。

享保十六年三月西蓮寺より篠山藩に提出した、「吹下村西蓮寺縁起」に依れば、

「一、逞龍山西蓮寺者、寛永之頃河南出雲友房與申者有之。其子丹_ニ登人出家仕、法名有道ト申、小庵ヲ結_ニ閑居仕候。其後京都知恩院ニ相願ヒ、御末寺ニ罷成、右之山號寺號被下之候。

一、（前略）若狹守樣御上意、慶安年中光忠寺（藩主松平氏菩提寺―筆者―）末山ニ罷成候。其節及破損罷在候處ヲ光忠寺十一代嚴譽和尚中興御取立ニ而御座候。」

であつて、之は大體西株の傳承と大差ない。然し、先の西株の系圖の長三郎の欄には朱書して西蓮寺の發端は

「草庵之處、松平山城守殿時代、御願申上候處、御菩提所之淨心寺之住僧、嚴立和尚ノ御取立ニテ龍喜山一岸寺ト號フ。後ニ御當代ニ至、今ノ光忠寺嚴譽上人改メテ逞龍山西蓮寺ト號ス。今ニ至リ一類ノ菩提ナリ。」

と稱し、別系統の傳承を錄して居る。所が東株の方の傳承では、時期は同じく寛永の頃であるが、東株の先祖、河南出雲尉友房の子（俗名不記）出家して法名友道と號し、今の寺地を點じてこゝに小庵を結び、同人の母も剃髮して同宿し念佛修行の生活を送つたが、後知恩院にさせる因縁あつてその直末寺に仰付られ逞龍山西蓮寺の號を下し置かれ、後城主松平若狹守の希望で光忠寺の末寺となり、嚴譽の手で中興再建されたと傳へるのである。双方とも西蓮寺が自氏の菩提寺であり、それは全く自分の一族である友道を開基とするといふ因縁に基けて居る點は揆を一にして居る。寺に對する發言權を掌握する上に決定的な根據となるものは、云ふ迄もなくその寺の開基が誰であるか、而して、その開基と自家の先祖とが如何なる關係にあるかといふ事であらう。物的施入の大小も確に寺に對する發言權を大いに支配するが、之は時に隆替を免れないに對し、草創に關する關係は恒久的のものである。従つて西蓮寺を繞つて、兩株の暗闘は様々な方面に展開して居るが、この草創の緣起に關する争は就中最も核心的なものであつた。

西株よりすれば、「東株より寺開基杯と申出候得共、是等之儀は不足取ニ偽リ」であり、「何分新過去帳、中右衛門始東株之者、添削り様々差略仕り候へ共、西株より往古小庵寺を結ひ候證據は、西株之先祖に而三郎左衛門、法名は露庵宗伯信士……右代々庵號相用ひ候事と聞傳ひ候得共、末世と成候ては右之仕來り茂相崩れ、太以數ヶ敷奉存候。何分東株古き位牌、新過去帳等、差略之上、一切相分り不申候。」であるが逆に東株にしてみれば、

「西長右衛門株に而者、西蓮寺開基同様と申出候者、是全く僞りに御座候。過去帳相改候に事寄せ、先祖之法名年號月日相分り不申杯と申、假令位牌紛失致し候共、法名年號月日相分り可申筈」

で過去帳上の戒名が支離滅裂して居る様なのは開基檀中等では決してない何よりの證據だといふのである。

戒名は受戒の印可として師家より與へられるのを本義とするが、事實上は、さうした宗教的意義よりも極めて社會的な性格をもち、その字數や用字には一定の枠があつて、一種の社會的層序の徵標たるの役割を果すのである。

殊に一建立の氏寺等に在つてはその開基檀越はその寺としては諸檀越中最も大切な檀那であるから、戒名も他に比べて重々しいものが贈られるのが普通である。かゝる戒名は過去帳や位牌に記されて、住職の管理に屬する所から、東株西株共盛に住職に働きかけて之を籠絡し、その記載を適當に書替させて自家の優位と相手の劣位を主張する、その根據たらしめんとして兩株は門中や本寺迄も引入れて、文政六年春以降頻りに暗闘を重ねた。右兩株の具狀は即ち共にそうした經緯を踏えて居るのである。

西株の開基を否定する東株の所傳では

開基 照譽心光禪尼 友道母

開山 嚴譽上人 本寺光忠寺十一代

第一代 照譽圓龍大德 友道事

となつて居る。開基の問題は右にいふ如く、寺との關係に於て最後の極め手となる所から、裁判に於ても爭論の中心となつたらしい。そして公平にみて東株の方に可成捏造の形迹がある。蓋し西株は寺の緣起にもある通り、又系圖を楯にとつて友道を開基として絶對的な發言權を主張して譲らなかつたであらうし、東株はかゝる西株の立場を

奪ふ爲に、恐く自株の先祖中からでも照馨心光禪尼なる人物を拉し來つて之を友道の母に作り上げると共に、之を西蓮寺の草創縁起の中にも入れ込み、結局之を首位に置いて自家の立場をひき上げ、西株の根據とする友道をその下位に置いて、寺に於ける自家の地位を根據づけんとしたものかと考へられる。

かゝる黑白相容れざる双方の所傳に對して、藩の判決は結局双方を妥協せしめる外なかつたが而もその妥協點は前と後とは幾らか動搖して居る。即ち天保十一年正月の「永代定一札之事」（天保十年十二月の判決）では

「一、當寺開基友道 但し東西之先祖に而惣持定開基に相定被仰付候事
附り、是迄照馨心光禪尼之位牌已後相用候儀、堅停止與仰付候也」

であるが同十二年閏正月の定書では

「一、西蓮寺開山者友道に相定候得者、當寺開山友道與申位牌を建可申事

一、照馨心光禪尼之位牌に彫付有之候當寺開基之號引捨、友道實母と記し置可申事」

とあるのである。之によると裁判が行はれて居た當時は東株が主張を通して、照馨心光即ち東株の開基といふ事になつて居たらしい。先の判決では、兩株の先祖として惣持寄で友道を開基とし、照馨尼そのものを認めない建前であつたが、後の定書では開基は問題の埒外に置かれると共に、友道が開山として只開山のみが設けられ、照馨尼は單に友道の母たる事のみが認められて開基としては認められぬ事となつた。西株はこの「開山」を「開基」とする様八方運動したが藩はとり上げなかつた。

この開基の問題は判決ではいつも條文の冒頭に掲げられて居るのであり、而も前後に於てその決を異にして居る。斯くすべての事項よりも最優先的に、而もそれが裁判によつてまで決められねばならなかつたといふ事態の中に、

寺開基のもつ深い含蓄が認められる。

先にも觸れた所であるが、於茲再び西蓮寺に於ける「寺」の性格の屈折を考へさせられる。蓋し友道が遁世して小庵を結んだ草創當時の西蓮寺（勿論當時は西蓮寺の名はない）は何れの宗派にも屬せず、何處の寺とも本末關係を有しなかつた。之が如何なる理由で知恩院と關係を生ずる様になつたか、何れの傳に従ふも詳かでないが、或は東株の傳承のいふ如く友道が念佛修行者であつた爲かも知れない。然し一度び淨土宗所屬寺院として登録されて後は當然淨土宗の威儀に従ひ内外が莊嚴せられて行つたであらう。その意味で慶安中光忠寺嚴譽に依つて中興再建せられたのは本寺の體裁を整える上に畫期的な事件であつたらう。淨土宗寺院である以上、その本尊は當然阿彌陀如来でなければならぬし又什物帳（寶曆三年）には二尊（彌陀釋迦）兩大師（善導法然）像の寄進のみゆるのも可然き處である。又歷代住職の出自は今日全く知る由もないが、本寺に晋董する以上、何れ關東檀林に於て所定の業を修した能化であつたであらう。かくて西蓮寺は外見上淨土宗寺院として一切の威儀をつくして居たであらうが、然しそれは決して專修念佛但信口稱の法然教義を宣布し、乃至三寶止住の精舍として一般社會を教化する、寺の通義をその本質的な使命としたのではない。一類の菩提寺として、獨り河南といふ特定の同族の爲のみに存在する性質のものであり、所屬宗派の宗義の如きは殆ど全く何等の比重も持つて居なかつたといつてよい。即ち本寺が淨土宗である事は極めて便宜的なものであり、淨土宗でなければならぬ理由は少しもなく、宗派の如きは實は何であつても構はない譯であつた。友道がもし參禪學道の人であり、三密加持の行者であり、或は法華の持經者であるに應じて、西蓮寺は或は禪宗に、或は眞言宗に或は又日蓮宗に屬し、従つて名稱も亦西蓮寺とは稱しなかつたであらう。然し何れにしても河南株との關係を通じて果す社會的機能は、今の西蓮寺と大差なきものであつたに相違ない。友道草創當初の、無宗派の草

庵であつた時代こそ未だ「寺」の本義に稍々近い性格を具へて居たとみるべきである。

かくて西蓮寺は一般社會にとつては關係甚だ薄いものであつたけれども、二つの河南株にとつては正しく關心の焦點そのものであつた。兩株が積年に亘り激しい反目と暗闘をくりかへしたのは、株そのものの、強固な團結が前提となつて居るが、逆に又爭を通じて團結は一層強固にせられた。然るにさうした相即の關係は實は西蓮寺を繞る問題に於て最も具體化せられたのである。これは實に西蓮寺といふものが同族結合の中樞に在るものに拘つて居るからであつて、もし末梢的なものに關する不一致であれば、上述した様な積年の激しい葛藤の續けられる事は到底考えられ得ない。即ち西蓮寺は二つの同族にとつては當に結合の紐帶たる役割を果すものであつた。本尊の佛像を祀る事は寺としての體裁を整へる爲の表面的な要件、謂はゞそれは只一つの看板にすぎず、又逆に佛像が祀つてあるから一應寺としての體裁は具へて居るが、事實上、それは株結合の紐帶としての比重が最も重いといふ點では、彼の同族神や、血縁宮座に於ける氏神とその性格は甚しく接近して來て居ると見ざるを得ない。

我國の神社には本來今の様な専門の神職は居ないのが寧ろ普通であつた。神は氏子自身によつて祭らるべきものであり、本來氏子以外に祭り手のあるべきものではなかつた。頭家や宮座の組織が発生する所以は茲にある。然るに寺院はそれと全く性質を異にし、本來さうした封鎖性とは對蹠的な筈のものである。阿蘭若はもと靜寂處を意味し、佛法僧の三寶止住の場所であつて、三者何れの一を缺くも寺としての體をなさなくなるものが、本來の意味に於ける寺であらう。僧寶なき所に法寶なく法寶なき所に佛寶も亦あり得ない。然るに西蓮寺は、今もさうである様に過去に於ても無住であつた事が珍しくない。住職の居る事は寺そのものの、存立には必ずしも不可缺の要件ではなかつた。寺の諸年中行事は住職の在否に不拘寺年番の管理に屬し、檀中が實際の衝に當つて居るのは氏神や同族の

祭が氏子や同族自らの組織で運営されると相似たものがある。寶曆十三年の什物帳に

「又高野山へ良起（當寺の二代之齒骨被成御納、月牌料御寄附に附、當村河南利八郎名前にて、月牌受取請文有之、宿坊は玉藏院に、^{〔ナリカ〕}當寺は俗姓之寺故位牌灰骨を被成贈くるゝ也。」

といつて居るが、出家者の集團といふ寺の本義に立返れば「俗姓之寺」とは、誠にそれ自身矛盾した觀念といふ外はない。

(六)

吹下村は村落の性質上所謂畿内型に屬し、小農乍ら何れも幾何かの自作地をもつ高持本百姓から成り、さしたる大地主も居ないが又所謂水呑も居ない。各戸の所有地を、今僅かに遺る文政十二年の水帳によつて整理すると左の様な數字が得られるのである。

西株		東株	
彌兵衛	六二、〇一五 <small>反敵歩</small>	幸七	七五、一八五 <small>反敵歩</small>
徳右衛門	一四二、〇七五	<small>（當時吹下村庄屋）</small> 中右衛門	三五三、二六
五郎兵衛	四四、二五五	重左衛門	八五、一九五
重右衛門	七三、〇九五	五郎太夫	二二四、一四
五太夫	七四、〇四五	(以下不詳)	

經營面積に於て東株は明かに西株を壓倒して居る。天保十年以來の爭論に於て、地方役人が皆東株に加擔して居るといつて西株が切齒して居るのも或はかうした東株の經濟的な實力が物をいつて居たのかもしれない。西株にいはせれば、東株の頭目である中右衛門家は今（天保十年）

こそ庄屋風を吹かして居るが、寛文から後久しく、所持高漸く六石七斗三升にすぎず、それから後十石、二十石と増加し明和の頃やつと村肝煎となり、以後天保十年迄に漸く三代を閲した庄屋であつて、要するに成上り者に過ぎない。根本の由緒ある西株とはその素性が違ふといふ所であらう。その事實を今穿鑿する要はない。たゞ兩株間の險惡な空氣が逐次激成されつゝあつた文化文政の頃、社會的にも經濟的にも東株の勢力は漸次西株を壓せんとしつゝあつた事は明白である。

斯うした優勢な社會經濟的地歩の確立は前にものべた如く單にそのまゝでは過されず、その現實を現實として妥當ならしめる保證が得られねばならぬが、かゝるものは常にその協同體の出自即ち祖先に求められる所に我國の族縁的社會の特徴がある。結果が先づ先に在り、それに相應しい原因が後から求められるのであつて、血の尊貴に關する傳承が茲に發生するのである。所がかゝる血の尊貴に關する保證は何等かの宗教的權威體と一種の族縁的關係をもつ事に依つて最も具體化せしめられる。その心的過程は正しく神話的心意といはねばならぬものである。神との血縁のより濃厚なものは、より稀薄なもの或はそれを全然缺いて居るものよりも社會的經濟的に當然一層優位にあるべしといふ觀念が基本に在り、かゝる神との族縁關係の濃淡を具象的に標すものが、實にその神を祭る場合の座席に外ならないのである。之は前にのべた神により近く座するものは社會的にもより優位を保證せられるといふ事と裏腹をなすのであつて、かゝるケースの最大級の範例は言ふ迄もなく、大和朝廷と記紀神話の原型の成立との關係であるが、それはいはゞ國史の基層を一貫する一種の民族的心意型ベインとも稱すべきものであらう。

東西兩河南株にとつて、西蓮寺の宗義や奉安する佛格が少しも問題でなく、却つてそこに占むる座次、過去帳の記載面に與へられる位置、就中開基に關する傳承を繞つて激しい争を展開した恰度その頃は又東株の勢力が西株を

壓倒する勢を示しつゝあつた時であるのには、深い内面的な關係がある。即ち西蓮寺といふ宗教的客體と自己との族縁關係の濃度如何が、現在の社會的經濟的地位に論理的保證を與へ又は與へなくなるといふ切實な問題に連つて居る所に、兩株が激しい暗闘を行つた根本的な理由がある。西蓮寺といふ「寺」は西株にとつても東株にとつても世俗的地歩に對する保證の根據となるものであるから、完全に之を自己の手中に收め、同時に相手との關係を稀薄ならしめるか若くは切離してしまふ事が望ましい。然るに之を手中に收めるに際して最後の極め手となるものは之との族縁關係であるから、兩株とも自己の血統である友道を開基として主張したのであるが、之では結局水掛論に終るべく、殊に西株は系圖を擁して居る所から、東株としては、西株の立場を奪ふ爲には西株の論據とする友道の上にゆく尊屬を拉し來つて開基とする以外に方法なく、さりとて之を友道の父系にかくるならば、再び西株の系圖の記載と抵觸する處から、系圖に記されて居ない母系にかけて、友道の母照馨心光なる人物を拉し來つて開基としたものであらう。東株のこの策略は確に或る程度は效を奏して、ともかく、裁判に於て問題化する迄に漕ぎつけて居たのであつた。従つて判決が東西双方の立場を妥協せしめ西蓮寺を東西惣持として睦く運営させる爲には、先づ友道を開基であると同時に東西共通の先祖と定め、東株のみに關係ある照馨心光は問題の埒外におかなければならなかつた。株爭終始帳の一節に

「……………兩持に而睦敷仕候様、御定被爲仰付候故、又忠右衛門此節友道を大事仕候。……………（西株で）開山友道

の位牌を拵候後は末代迄、譬へ如何様に申者在之候共、如來之尊前に建置可申候事。」
といつて居るが、寺に對する族縁的觀念を端的に物語るものがある。

(七)

要之、西株と東株との發生的關係は何處迄行つても結局詳かでないが、蓋し西株と西蓮寺は早くより氏寺的な關係を保持したものであらう。當時に於ては東株は西株の下位に立ち、西蓮寺に於ても右座を與へられて居たのが、その後東株の勢力が逐次優勢となるに従つて、それを宗教的に根據づける必要から、種々の角度から逐次西株の氏寺である西蓮寺の乗取りに腰を入れ始めたものであらう。事件の歸趨は簡約すればたゞ之だけの事である。然し、具體的な事實の展開の裡には、種々の點に於て宮座を結成すると同じ精神構造から延いては我民族文化の基層に横たはる諸種の心意型を暗示するものがある事は上來述べて來た通りである。

西蓮寺は二つの河南氏(「氏」はこの場合カブといふ形をとつて居る)にとつては規模こそ小さいけれども、正しく「氏寺」に外ならない。普通彼の「一建立」といはれる寺院も、草創の當初に於ては確にその氏族の氏寺であつたであらうが、今ではその寺に對する當該氏族の管理權は著く弱體化し、檀家組織は地緣的となるか、更には地緣をも越えて、一村落内に於ても自他村數ヶ寺の檀家が錯綜する形をとる事も往々ある。斯うした近世の寺檀關係が如何にして發生し發達したかは、日本佛教史上未解決の問題で、一般にいにはる様に簡單に之を寺請制度にのみ歸する事は出来ない。この西蓮寺の様に中世以來の氏寺の形態を猶ほ存續して居るものもあるのである。それはともかく西蓮寺が河南株との關係の中にのみその氏寺的な性格を長く保持したのは、何よりも強く河南「株」そのものの存續に拘る事である。而して村落構成上「株」結合が重要因子となつて有力な機能を持續して居るのは當地方一般の趨勢であるが、それは又種々の歴史的風土的條件に依る事であらう。

中古から中世へかけての上流貴族や武士の氏寺に關しては從來も種々の研究がされて居るが、そこに座的な構造があつたか如何かについては殆んど考へられて居ない様である。然し氏寺が機能的には氏神に接近して居り、氏神には宮座が結成され、而してかゝる宗教的な場に於ける座や、それを占める集團の成立が、日本文化の基層に横はる心意型から由來して居るならば、宮座に對して寺座ともいふべきものが氏寺等の場合にもあつたと考へて可然きでなからうか。少くとも西蓮寺の場合の様な事實のある以上、もとより之は時期的には近世の事柄ではあるが、かゝる心意型は時代を越えて文化の基層に拘るものであり、別の表現形態をとつてむしろ發生期の氏寺等にもあつたのではなからうか。今後に於ける一層の史料蒐集が切望される所である。(完) (佛教大學講師)